

# ロシア語の受動節における主語特徴の分布\*

山田 久 就

## 1 始めに

ロシア語は主格・対格型の格配列を持つ言語である。ロシア語をはじめ、主格・対格型の格配列を持つ言語の多くは、大多数の能動節で主格の名辞 (nominal) だけが示す統語的特徴をいくつか持っている<sup>1</sup>。このような統語的特徴は「主語特徴 (subject properties)」とよく呼ばれている<sup>2</sup>。本稿でも、これに従って、大多数の能動節で主格名辞だけが持っている統語的特徴を「主語特徴」と呼ぶことにする。例えば、ロシア語の「再帰 (所有) 代名詞の先行詞になることができる」という統語的特徴は、大多数の能動節で主格名辞だけが持っていて、主語特徴と呼ぶことができる<sup>3</sup>。

主語特徴とは大多数の能動節で主格名辞だけが持っている統語的特徴であるから、必ずしも全ての節で主格名辞だけが主語特徴を示すわけではなく、また、必ずしも全ての節で主格名辞が主語特徴を示すわけでもない。いくつかの言語において受動節や一部の能動節で主格以外の格を担っている名辞が主語特徴の一部 (あるいは、全部) を示したり、主格名辞が主語特徴の一部 (あるいは、全部) を示さなかったりすることが報告されている。

受動節では、能動節の主格名辞に意味的に対応する名辞 (日本語では「に」、「によって」、英語では by、ロシア語では具格で現われる。以下では、便宜のために「受動態名辞」と呼ぶことにする。) が主語特徴の一部 (あるいは、全部) を示したり、主格名辞が主語特徴の一部 (あるいは、全部) を示さなかったりする。

多くの言語に「経験者 (Experiencer)」と一般に呼ばれている意味役割を担っている名辞が斜格 (主格以外の格) で現われる述語 (以下では、「斜格経験者述語」と呼ぶことにする。) がいくつかある。例えば、ロシア語には、経験者名辞が与格で現われる述語 (以下では、「与格経験者述語」と呼ぶことにする。) がいくつかある。ロシア語の与格経験者述語の例を下に示す。

- (1) Ivanu npravitsja Tanja.  
 イワン・DAT 好いている・PRS ターニャ・NOM  
 「イワンはターニャを好いている。」
- (2) Olegu videlas' mashina.  
 オレグ・DAT 見える・PST 車・NOM  
 「オレグに車が見えた。」

斜格経験者述語を主要部 (head) とする能動節では、斜格経験者が主語特徴の一部 (あるいは、全部) を示したり、主格名辞が主語特徴の一部 (あるいは、全部) を示さなかったりする。

(3)は、ロシア語の所有表現の一つであり、意味役割「所有者」が前置詞 u+ 属格名詞句で現われている。

- (3) U menja est' denigi.  
 に 私・GEN ある・PRS お金・PL, NOM  
 「私にはお金がある。／私はお金を持っている。」

世界の多くの言語が、ロシア語の(3)のように所有者が斜格名辞で現われる能動節を持っている。このような能動節では、斜格所有者が主語特徴の一部 (あるいは、全部) を示したり、主格名辞が主語特徴の一部 (あるいは、全部) を示さなかったりする。

主語特徴は現代の理論的文法研究の一つのテーマになっている。多くの研究者が主語特徴に関心を向けるようになったのは、やはり、Keenan(1976)やRG (Relational Grammar) (Perlmutter 1982 など) の影響である。現代の文法理論で主語特徴に特に注目しているのはRGとLFG (Lexical Functional Grammar) (Joshi 1989, Mohanan 1994 など) である。ロシア語の主語特徴については、RGでPerlmutter (1982) が簡単に扱っているが、LFGでは全く扱われていない。

普遍文法の構築を視野に入れた文法研究では、次のような課題が考えられる。(i)世界のそれぞれの言語がどのような主語特徴を持っているのかを明らかにすること。(ii)それぞれの言語が持っているそれぞれの主語特徴が受動節や斜格経験者述語を主要部とする能動節などでどのような分布を示すのかを明らかにす

ること。(iii)世界の言語の主語特徴の分布を比較することによって、どのような主語特徴の分布が一般的であるかを明らかにすること。(iv)世界の言語の主語特徴の分布を説明できる文法理論を構築すること。対象をロシア語の文法研究に限定すると、ロシア語がどのような主語特徴を持っているのかを明らかにし、それぞれの主語特徴が受動節やいくつかの種類<sup>3</sup>の能動節でどのような分布を示すのかを明らかにすることが重要である。本稿では、考察の対象を受動節に限定し、ロシア語の主語特徴が受動節でいかなる分布を見せるのかを明らかにしていきたい<sup>4</sup>。

本稿の構成は次の通りである。第2節では、ロシア語が持っている主語特徴を提示する。第3節では、ロシア語の受動節について簡単に説明する。第4節では、ロシア語の受動節における主語特徴の分布を論じる。主語特徴は受動節における分布の観点から次の四つのタイプに分けることができる。主語特徴A：受動節で主格名辞と受動態名辞の両方が持っている主語特徴。主語特徴B：受動節で主格名辞は持っているが受動態名辞は持っていない主語特徴。主語特徴C：受動節で受動態名辞は持っているが主格名辞は持っていない主語特徴。主語特徴D：受動節で主格名辞と受動態名辞の両方が持っていない主語特徴。ロシア語のそれぞれの主語特徴が上の主語特徴A, B, C, Dのどのタイプに入るのかを明らかにする。

## 2 主語特徴

第1節で定めたように、主語特徴とは、大多数の能動節で主格名辞だけが持っている統語的特徴である。本節では、ロシア語の主語特徴を八つ提示する。

まず最初に扱うのは、再帰（所有）代名詞に関する統語的特徴である。(4)は再帰代名詞を含んでいて、(5)は再帰所有代名詞を含んでいる。(4)、(5)の主格名辞はともに再帰（所有）代名詞の先行詞になることができるが、(4)の与格名辞や(5)の対格名辞は再帰（所有）代名詞の先行詞になることができない。

- (4) Ivan<sub>1</sub>                      rasskazal      Sashe<sub>2</sub>                      o                      sebe<sub>1/\*2</sub>.  
 イワン・NOM    語る・PST    サーシャ・DAT    について    自分・LOC  
 「イワンがサーシャに自分について語った。」

- (5) Ivan<sub>1</sub> ubil Sashu<sub>2</sub> v svoej<sub>1/\*2</sub> komnate.  
 イワン・NOM 殺す・PST サーシャ・ACC で 自分の 部屋・LOC  
 「イワンがサーシャを自分の部屋で殺した。」

このように、大多数の能動節で再帰（所有）代名詞は主格名辞だけを先行詞に選ぶ。したがって、ロシア語の統語的特徴「再帰（所有）代名詞の先行詞になることができる」は、主語特徴である。ロシア語のように、大多数の能動節において主格名辞だけが再帰（所有）代名詞の先行詞になることができる言語は世界の諸言語の中にたくさん存在する。柴谷 (1978) などが述べているように、日本語もそのような言語の一つである。英語のように、全体的に、再帰（所有）代名詞の先行詞になることができる名辞が主格名辞に限定されていない言語もある。

ロシア語の再帰（所有）代名詞の先行詞になることができる名辞に制限があることは、かなり前から記述されている。Peshkovskij (1914/1956), Shaxmatov (1925/1941), Vinogradov (1947/1986)も再帰（所有）代名詞の先行詞の制限に関して簡単ながら言及している。Shaxmatov (1925/1941: 496)は、文の主語だけが再帰（所有）代名詞の先行詞になることができるという主旨のことを書いている<sup>5</sup>。Peshkovskij (1914/1956: 163), Vinogradov (1947/1986: 272)は、行為あるいは状態の主体（ロシア語で sub"ekt）だけが再帰（所有）代名詞の先行詞になることができるという主旨のことを述べている。彼らが用いている用語「文の主語」や「行為あるいは状態の主体」が具体的に何を指すのかが問題になるのだが、能動節では、主格名詞句を指していると思われる。

次に、主節の名辞による従属節のコントロールに関わる四つの統語的特徴について述べる<sup>6</sup>。コントロールに関わる第一の統語的特徴は「pered-tem-kak (前／前に) に導かれる不定詞従属節をコントロールすることができる」である。(6)、(7)では、pered-tem-kak (前／前に) に導かれている従属節の主要部動詞が不定詞の形をしている。そして、この不定詞従属節では、定形節であれば主格で現われる名辞が明示的に現われていない。(6)、(7)で主節の主格名辞は不定詞従属節をコントロールすることができる。それに対して、(6)の与格名辞や(7)の対格名辞は不定詞従属節をコントロールすることができない<sup>7</sup>。

- (6) pered-tem-kak [[e](NOM)<sub>1/\*2</sub> uexat' v Moskvu],  
 前に 去る・INF に モスクワ・ACC  
 Oleg<sub>1</sub> pozvonil Sashe<sub>2</sub>.  
 オレグ・NOM 電話する・PST サーシャ・DAT  
 「モスクワに去る前にオレグがサーシャに電話した。」
- (7) Oleg<sub>1</sub> priglashil Sashu<sub>2</sub> domoj  
 オレグ・NOM 招待する・PST サーシャ・ACC 家に  
 pered-tem-kak [[e](NOM)<sub>1/\*2</sub> zhinit'sja].  
 前に 結婚する・INF  
 「結婚する前にオレグがサーシャを家に招待した。」

このように、ロシア語の pered-tem-kak (前/前に) に導かれる不定詞従属節をコントロールすることができるのは大多数の能動節で主格名辞だけである。したがって、「pered-tem-kak (前/前に) に導かれる不定詞従属節をコントロールすることができる」という統語の特徴は主語特徴と呼ぶことができる。ヨーロッパのいくつかの言語では、主節の主格名辞だけがいくつかのタイプの不定詞従属節をコントロールすることができる。

コントロールに関わる第二の統語の特徴は、「副詞的分詞 (Adverbial Participle) 従属節をコントロールすることができる」である。この統語の特徴も主語特徴である。(8)では、副詞的分詞従属節が用いられていて、定形節であれば主格で現われる名辞が明示的に現われていない。(8)で主節の主格名辞は副詞的分詞従属節をコントロールすることができるが、主節の与格名辞は副詞的分詞従属節をコントロールすることができない。

- (8) [[e](NOM)<sub>1/\*2</sub> Zakonchiv rabotu],  
 終わる・AdvP, PST 仕事・ACC  
 Sasha<sub>1</sub> pozvonil Tane<sub>2</sub>.  
 サーシャ・NOM 電話する・PST ターニャ・DAT  
 「仕事を終えて、サーシャはターニャに電話した。」

一般化して言うと、大多数の能動節で主格名辞だけが副詞的分詞従属節をコントロールすることができる。

コントロールに関わる三番目の統語的特徴「不定詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができる」について述べる。(9)では、主節の主格名辞が不定詞従属節をコントロールしている。不定詞従属節でコントロールのターゲットになっているのは主格名辞である。

- (9) Oleg<sub>i</sub>                xotet                [[e](NOM)<sub>i</sub>    vstretit'          Ivana].  
 オレグ・NOM      たい・PRT                                会う・INF      イワン・ACC  
 「オレグはイワンに会いたがっている。」

大多数の能動節で、主格名辞は不定詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができるが、主格以外の格を担っている名辞は不定詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができない。したがって、統語的特徴「不定詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができる」は主語特徴の一つである。

コントロールに関わる最後の統語的特徴について述べる。統語的特徴「副詞的分詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができる」も主語特徴である。大多数の能動節で、主格名辞は副詞的分詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができるが、主格以外の格を担っている名辞は副詞的分詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができない。主格名辞が副詞的分詞従属節におけるコントロールのターゲットになっている例は先に示した(8)である。

次に、形容詞的分詞に関わる統語的特徴について述べる。大多数の能動節で、主格名辞は形容詞的分詞を用いた関係節で関係節化されることができ、主格以外の格を担っている名辞は形容詞的分詞を用いた関係節で関係節化されることができない。したがって、統語的特徴「形容詞的分詞を用いた関係節で関係節化されることができ」は、主語特徴とみなせる。主格名辞が形容詞的分詞を用いた関係節で関係節化されている例を(10)で示す。

- (10) [[e](NOM)<sub>i</sub>    chitajushchij      knigu],    student<sub>i</sub>  
    読む・AdjP, PRS    本・ACC    学生  
 「本を読んでいる学生」

統語的特徴「意図性を表わす副詞と関係を結ぶことができる」も主語特徴で

ある。namerenno (意図的に、故意に) や narочно (意図的に、故意に) などの意図性を表わす副詞は、能動節で用いられる場合、主格名辞とだけ関係を結ぶ。すなわち、節によって表わされる状況に対する主格名辞の指示対象の意図性だけを表わすことができる。例えば、(11)で副詞 namerenno (意図的に、故意に) は文によって表わされる状況に対する主格名辞の指示対象の意図性は表わすことができるが、対格名辞の指示対象の意図性は表わすことができない。

- (11) Milicija          namerenno    arestoval          Olega.  
 警察・NOM    意図的に      逮捕する・PST    オレグ・ACC  
 「警察がオレグを意図的に逮捕した。」

世界の多くの言語がそうであるように、ロシア語でも、命令文で命令の受け手になることができるのは、大多数の能動節で主格名辞に限られている。ロシア語の能動節では、主格以外の格を担っている名辞は命令文で命令の受け手になることができない。したがって、統語的特徴「命令文で命令の受け手になることができる」は主語特徴である。(12)は、ロシア語の命令文の例で、能動節の主格名辞が命令の受け手になっている例である。

- (12) Ubej              Ivana.  
 殺す・IMP    イワン・ACC  
 「イワンを殺せ。」

以上がロシア語の八つの主語特徴である。

### 3 ロシア語の受動節

ロシア語の動詞には、完了相動詞と不完了相動詞がある。多くの場合、完了相動詞と不完了相動詞は意味的に対をなしている。例えば、完了相動詞 postroj't' (建てる) と不完了相動詞 strojt' (建てる／建てている)。完了相動詞と不完了相動詞では受動態形の作り方に違いがある。完了相動詞の受動態形は存在動詞 byt' (ある) + 受動態形容詞的分詞の短語尾形である。完了相動詞 postroj't' (建てる) の受動態形は byt' postroen <男性形> である。不完了相動詞の受動態形には再帰動詞が用いられる。不完了相動詞 strojt' (建てる／建てている)

の受動態形は *strojt'-sja* である。ロシア語の受動節では、受動態名辞（能動節の主格名辞に意味的に対応する名辞）は具格で現われる。(13)は完了相動詞の受動態形、(14)は不完了相動詞の受動態形が用いられている例である。

- (13) Dom            byl            postroen            imi.  
 家・NOM   ある・PST   建てる・PAS   彼ら・INS  
 「家は彼らによって建てられた。」
- (14) Dom            strojtsja            imi.  
 家・NOM   建てる・PAS, PRS   彼ら・INS  
 「家は彼らによって建てられている。」

ロシア語の受動態形は、口語では用いられることがほとんどなく、文語でもあまり用いられない。特に、不完了相動詞の受動態形は、論文調の文章では用いられるが、小説や新聞などではほとんど用いられない。また、ロシア語には、受動態形を欠く他動詞が多くある。ロシア語の受動態に関するさらなる詳しい情報については、Bulanin (1986), Bondarko et al. (eds.) (1991)などを参照していただきたい。

#### 4 受動節と主語特徴

主語特徴を受動節における分布を基準に次の四つのタイプに区別する。主語特徴 A：受動節で主格名辞と受動態名辞（能動節の主格名辞に意味的に対応する名辞）の両方が持っている主語特徴。主語特徴 B：受動節で主格名辞は持っているが受動態名辞は持っていない主語特徴。主語特徴 C：受動節で受動態名辞は持っているが主格名辞は持っていない主語特徴。主語特徴 D：受動節で主格名辞と受動態名辞の両方が持っていない主語特徴。この節では、この四つのタイプの主語特徴のそれぞれに第2節で提示したロシア語の八つの主語特徴のどれが属するのかを順に示していく。

##### 4.1 主語特徴 A

第2節で、ロシア語の大多数の能動節で主格名辞だけが再帰（所有）代名詞の先行詞になることができることを示した。受動節では、Klenin (1974), Perlmutter (1982), Kozinskij (1983)などが述べているように、主格名辞も受動態名



辞も再帰（所有）代名詞の先行詞になることができる。例を示すと、(15)、(16)で主格名辞も受動態名辞（具格名辞）も再帰所有代名詞の先行詞になることができる。

- (15) Sasha<sub>1</sub> byl ubit Ivanom<sub>2</sub>  
 サーシャ・NOM ある・PST 殺す・PAS イワン・INS  
 v svoej<sub>1/2</sub> komnate.

で 自分の 部屋・LOC

「サーシャがイワンに自分の部屋で殺された。」

- (16) Rebenok<sub>1</sub> byl otpravlen Annoj Pavlovnoj<sub>2</sub>  
 子供・NOM ある・PST 送る・PAS アンナ・パプロブナ・INS  
 k svoim<sub>1/2</sub> sestram.

の所に 自分の 姉／妹・DAT

「子供はアンナ・パプロブナに自分の姉／妹の所に送られた。」

(Klenin 1974: 64)

(15)、(16)では、主格名辞の指示対象と受動態名辞の指示対象がともに人間である。そのため、再帰所有代名詞の先行詞に主格名辞を選んでも、受動態名辞を選んでも文に自然な解釈を与えることができる。このような場合、多くのインフォーマントは再帰所有代名詞の先行詞を主格名辞とする読みが再帰所有代名詞の先行詞を受動態名辞とする読みよりもかなり強いと判断している。また、(15)、(16)の再帰所有代名詞の先行詞を受動態名辞とする読みをほとんど容認しないインフォーマントもいる。

下の(17)は、(15)、(16)と違って、主格名辞の指示対象が物であり、再帰所有代名詞の先行詞に主格名辞を選ぶと自然な解釈を得ることができない。このような文で受動態名辞を再帰代名詞の先行詞とする読みを容認しないインフォーマントはいない。

- (17) Kniga byla napisana Ivanom<sub>1</sub> dlja sebja<sub>1</sub>.  
 本・NOM ある・PST 書く・PAS イワン・INS ために 自分・GEN  
 「本はイワンによって自分のために書かれた。」

簡単な比較として、日本語の再帰代名詞「自分」について言及する。第2節

でも触れたように、日本語で「再帰代名詞の先行詞になることができる」という統語的特徴は主語特徴である。受動節では、柴谷 (1978: 139) などが述べているように、主格名辞は再帰代名詞の先行詞になることができるが、受動態名辞は再帰代名詞の先行詞になることができない。すなわち、日本語では、「再帰代名詞の先行詞になることができる」という主語特徴は主語特徴 B に属する。

#### 4.2 主語特徴 B

ここでは、主語特徴 B (受動節で主格名辞は持っているが受動態名辞は持っていない主語特徴) に分類される五つの主語特徴について論じる。

第2節で、大多数の能動節で主格名辞だけが pered-tem-kak (前/前に) に導かれる不定詞従属節をコントロールすることができることを例示した。受動節では、主格名辞は不定詞従属節をコントロールすることができる。それに対して、受動態名辞は不定詞従属節をコントロールすることができない。(18)は、受動節の主格名辞が不定詞従属節をコントロールしていて、容認される文である。それに対して、(19)は、受動態名辞が不定詞従属節をコントロールしていて、容認されない文である。(20)では、主格名辞は不定詞従属節をコントロールすることができるが、受動態名辞は不定詞従属節をコントロールすることができない。

- (18) pered-tem-kak      [[e](NOM)<sub>1</sub>          stat'                  nachal'nikom],  
 前    なる・INF          主任・INS  
 Oleg<sub>1</sub>                      byl                      napravlen  
 オレグ・NOM      ある・PST      派遣する・PAS  
 v Leningrad.  
 に レニングラード・ACC  
 「主任になる前、オレグはレニングラードに派遣された。」

- (19) \*Rabota              byla                      zakonchena          Tanej<sub>1</sub>  
 仕事・NOM      ある・PST      終える・PAS      ターニャ・INS  
 pered-tem-kak      [[e](NOM)<sub>1</sub>      zabolet'].  
 前に    病気する・INF  
 「病気になる前に仕事はターニャによって終わられた。」

- (20) Sasha<sub>1</sub>                      byl                      priglashon          domoj Olegom<sub>2</sub>  
 サーシャ・NOM      ある・PST      招待する・PAS      家に      オレグ・INS

pered-tem-kak [[e](NOM)<sub>1/\*2</sub> zhinit'sja].

前に

結婚する・INF

「結婚する前にサーシャがオレグに家に招待された。」

主語特徴「pered-tem-kak (前／前に)に導かれる不定詞従属節をコントロールすることができる」の受動節における分布についての研究は、筆者の知る限りでは、全く行われていないが、次に扱う主語特徴「副詞的分詞従属節をコントロールすることができる」が受動節でどのような分布を見せるのかについては多くの研究者が問題にしている、研究者の間で意見が異なっている。Rjabova (1981), Ickovich (1982)などは、受動節で主格名辞は副詞的分詞従属節をコントロールすることができるが、受動態名辞は副詞的分詞従属節をコントロールすることができないとしている。Yokoyama (1979), Rappaport (1984)などは受動節で主格名辞と受動態名辞がともに副詞的分詞従属節をコントロールすることができるとしている。自身が行った調査による筆者の判断では、Rjabova (1981), Ickovich (1982)などが述べているように、受動節で主節の主格名辞は副詞的分詞従属節をコントロールすることができるが、受動態名辞は副詞的分詞従属節をコントロールすることができない。(21)、(22)のように、受動節の主格名辞が副詞的分詞従属節をコントロールしている文は容認されるが、(23)、(24)のように、受動態名辞が副詞的分詞従属節をコントロールしている文は容認されない。

- (21) [[e](NOM)<sub>1</sub> Okonchiv v 1940 godu desjatiletku],  
 終える・AdvP, PST に 1940 年・LOC 第10学年・ACC  
 ja<sub>1</sub> osen'ju byl prizvan v armiju.  
 私・NOM 秋に ある・PST 呼ぶ・PAS に 軍隊・ACC  
 「1940年に第10学年を終えて、私は秋に軍隊に召集された。」  
 (Ickovich 1981: 137)
- (22) [[e](NOM)<sub>1</sub> Narushiv pravilo],  
 破る・AdvP, PST 規則・ACC  
 sosed<sub>1</sub> byl oshtrafovan.  
 隣人・NOM ある・PST 罰金を課す・PAS  
 「規則を破って、隣人は罰金を課された。」(Xrakovskij 1991: 173)

- (23) \*[[e](NOM)<sub>1</sub> Soxranjaja osnovnoe dejstvie romana],  
 保つ・AdvP, PRS 基本的な 筋・ACC 小説・GEN  
 mnogoe avtorami<sub>1</sub> pridumano zanovo.  
 多くのこと・NOM 作者・PL, INS 考え出す・PAS 新たに  
 「基本的な小説の筋を保ちながら、多くのことが作者達によって新たに  
 考え出された。」(Rjabova 1981: 56)
- (24) \*[[e](NOM)<sub>1</sub> Proletaja nad gorodom],  
 飛ぶ・AdvP, PRS 上で 街・INS  
 letchikom<sub>1</sub> byli sbrosheny listovki.  
 飛行士・INS ある・PST 投下する・PAS ビラ・PL, NOM  
 「街の上を飛びながら飛行士によってビラが投下された。」  
 (Rjabova 1981: 60)

次に、主語特徴「不定詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができる」について述べる。受動節では、主格名辞は不定詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができるが、受動態名辞は不定詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができない。(25)は、主格名辞が不定詞従属節におけるコントロールのターゲットになっている例である。

- (25) Ivan<sub>1</sub> ne xotel  
 イワン・NOM NEG たい・PST  
 [[e](NOM)<sub>1</sub> byt' arestovannym miliciej].  
 ある・INF 逮捕する・PAS 警察・INS  
 「イワンは警察に逮捕されたくなかった。」

統語的特徴「副詞的分詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができる」も主語特徴 B に属する。受動節では、副詞的分詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができるが、受動態名辞は副詞的分詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができない。主格名辞が副詞的分詞従属節におけるコントロールのターゲットになっている例を(26)に示す。

- (26) oni<sub>1</sub> pogibli,  
 彼ら・NOM 死ぬ・PST  
 [[e](NOM)<sub>1</sub> buduchi razoblacheny Olegom].  
 ある・AdvP, PRS 正体を暴露する・PAS オレグ・INS  
 「オレグに正体を暴露されて彼らは死んだ。」(Bulanin 1986: 69)

統語的特徴「形容詞的分詞を用いた関係節で関係節化されることができる」が主語特徴であることは第2節で述べた。この主語特徴も主語特徴Bの一つである。受動節では、主格名辞は形容詞的分詞を用いた関係節で関係節化されることができるが、受動態名辞は形容詞的分詞を用いた関係節で関係節化されることができない。(27)は、形容詞的分詞を用いた関係節で主格名辞が関係節化されている例である。

- (27) [[e](NOM)<sub>1</sub> napisannaja Ivanom], kniga<sub>1</sub>  
 書く・AdjP, PST, PAS イワン・INS 本  
 「イワンによって書かれた本」

#### 4.3 主語特徴C

第2節で、namerenno (意図的に、故意に)や narочно (意図的に、故意に)などの意図性を表わす副詞は、能動節で用いられる場合、主格名辞とだけ関係を結ぶことができることを述べた。(28)は第2節の(11)に対応する受動節である。(28)では、副詞 namerenno (意図的に、故意に)は具格で現われている受動態名辞の指示対象が文によって表わされる状況に対して持っている意図性は表わすことができるが、主格名辞の指示対象が持っている意図性は表わすことができない。

- (28) Oleg namerenno byl arestovan miliciej.  
 オレグ・NOM 意図的に ある・PST 逮捕する・PAS 警察・INS  
 「オレグが警察に意図的に逮捕された。」

このように、namerenno (意図的に、故意に)などの意図性を表わす副詞は、受動節で、受動態名辞とは関係を結ぶことができるが、主格名辞とは関係を結

ぶことができない。したがって、主語特徴「意図性を表わす副詞と関係を結ぶことができる」は主語特徴Cに属する。

日本語の意図性を表わす副詞「意図的に」は、(28)の日本語訳から分かるように、受動節で主格名辞と受動態名辞の両方と関係を結ぶことができる。英語の意図性を表わす副詞 *intentionally* も、日本語の「意図的に」と同様に、受動節で主格名辞と受動態名辞の両方と関係を結ぶことができる。英語に関するこの事実については、Jackendoff (1972) などが述べている。

#### 4.4 主語特徴D

主語特徴Dは、受動節で主格名辞と受動態名辞の両方が持っていない主語特徴である。第2節で提示した八つの主語特徴の中で主語特徴Dに属するのが一つある。主語特徴「命令文で命令の受け手になることができる」が主語特徴Dに属する。ロシア語の受動節では、主格名辞と受動態名辞の両方が命令文で命令の受け手になることができない。

(29)は英語の例文であり、(30)は日本語の例文であるが、(29)、(30)では、受動節の主格名辞が命令文で命令の受け手になっている。

(29) Be persuaded by your friends. (Palmer 1994: 111)

(30) タマニ監督ニシッカリ鍛エラレロ。(仁田 1991: 43)

ロシア語では、(29)、(30)のような受動節の主格名辞が命令文で命令の受け手になっている文は容認されない。Bulanin (1986: 25, 66-67)は、ロシア語で、動詞の受動態命令形は、形態論の観点からは可能であるが、実際に用いられないと述べている。彼は、その理由を受動節の主格名辞が命令文で命令の受け手になるのは意味的におかしいからとしている。しかし、日本語や英語で受動節の主格名辞が命令文で命令の受け手になることができる以上、この説明には問題がある。

受動態名辞が命令文で命令の受け手になっている文はロシア語、英語、日本語の全てで容認されない。

#### 4.5 まとめ

4.1から4.4では、主語特徴A、B、C、Dのそれぞれにロシア語のどのような主語特徴が属するのかを明らかにした。まとめると次のようになる。主語特徴A(受動節で主格名辞と受動態名辞の両方が持っている主語特徴)には「再帰(所

有) 代名詞の先行詞になることができる」が属する。主語特徴 B (受動節で主格名辞は持っているが受動態名辞は持っていない主語特徴) には「pered-tem-kak (前/前に) に導かれる不定詞従属節をコントロールすることができる」、「副詞的分詞従属節をコントロールすることができる」、「不定詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができる」、「副詞的分詞従属節におけるコントロールのターゲットになることができる」、「形容詞的分詞を用いた関係節で関係節化されることができる」が属する。主語特徴 C (受動節で受動態名辞は持っているが主格名辞は持っていない主語特徴) には「意図性を表わす副詞と関係を結ぶことができる」が入る。主語特徴 D (受動節で主格名辞と受動態名辞の両方が持っていない主語特徴) には「命令文で命令の受け手になることができる」が入る。

重要なのは次の二点である。第一に、ロシア語には主語特徴 A、B、C、D の全てがあること。第二に、ロシア語にはたくさんの主語特徴があるがそのほとんどは主語特徴 B であること。主語特徴 A、C、D は、筆者の知る限りでは、ロシア語にそれぞれ一つづつしかない。

## 5 終りに

本稿では、ロシア語にどのような主語特徴があるのかを提示し、それぞれの主語特徴が受動節でどのような分布を示すのかを明らかにした。本稿で示したロシア語の言語事実を、今後の研究において、他の言語の言語事実と比較することによって、言語一般に内在する傾向性、あるいは言語普遍性を明らかにする方向へと近づいて行きたい。

## 注

- \* 阿部軍治先生、狩野昊子先生、安井泉先生、西田光一氏に草稿に対して貴重なご助言をいただいた。ここにお礼を申し上げたい。Fjodor A. Akimov 氏、Irina M. Voznesenskaja 氏、Marina Ju. Zhukova 氏を中心に多くの方にロシア語のインフォーマントになっていただいた。感謝の意を申し上げたい。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ACC：対格、AdjP：形容詞的分詞、AdvP：副詞的分詞、DAT：与格、GEN：属格、IMP：命令形、INF：不定詞形、INS：具格、LOC：所格、NEG：否定辞、NOM：主格、PAS：受動態形、PL：複数、PRS：現在形、PST：過去形。本稿では、言語学で一般に用いられている用語を使って

いる。そのため、本稿で用いる用語とロシア語学で一般に用いられている用語には違いがある。本稿で用いる用語とロシア語学で用いられている用語の対応関係は次の通りである。形容詞的分詞：形動詞、具格：造格、受動態：被動相、所格：前置格、相：体、属格：生格、態：相、副詞的分詞：副動詞。\* は、文あるいは名詞句が容認されないことを表わす。

1. 本稿では、名辞 (nominal) という用語を、名詞句、前置詞句、後置詞句の総称として用いる。
2. 主語性 (subjecthood) を示す統語的特徴とも呼ばれることがある。主語特徴とは便宜的な名前であり、主語特徴を示す名詞句をすべて「主語 (subjects)」とみなしているのではない。したがって、「主語」を主語特徴を示す名詞句と定義しているのではない。本稿では、「主語」をどのように定義するべきかという問題をにしない。
3. 具体的な例は第2節で提示する。
4. ロシア語の与格経験者述語を主要部とする能動節における主語特徴の分布については山田 (1997) を参照していただきたい。
5. ロシア語で、「主語」は、一般的には、“podlezhashchee”である。Shaxmatov (1925/1941)は、“sub”ekt”というロシア語を“podlezhashchee”と同義で用いている。
6. コントロールという用語について説明する。名辞 A が従属節 B をコントロールするとは、従属節 B に明示的に現われていない名辞 C があり、名辞 A の指示対象が名辞 C の指示対象を決めること、すなわち、名辞 C の指示対象が主節の名辞 A の指示対象に一致することである。名辞 A と受属節 B の関係をコントロールと呼ぶ。名辞 A が名辞 C をコントロールするとも言う。名辞 A をコントローラー、名辞 C をターゲットと呼ぶ。
7. [e] は明示的に現われていない要素を表わす。(NOM) は [e] に当たる要素が定形節で主格で現われることを意味する。つまり、明示的に現われていない要素が主格を担っていることを意味するのではない。

### 参照文献

- Bondarko, A. V. et al. (eds.) (1991) *Teorija Funkcional'noj Grammatiki : Personal'nost', Zalogovost'* Sankt-Peterburg : Nauka.
- Bulanin, L. L. (1986) *Kategorija Zaloga v Sovremennom Russkom Jazyke*. Leningrad : Leningradskij Gosudarstvennyj Universitet.
- Ickovich, V. A. (1982) *Ocherki Sintaksicheskoy Normy*. Moskva : Nauka.
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.



- Joshi, Smita (1989) "Logical Subject in Marathi Grammar and the Predicate Argument Structure," *Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics*. 8. 207-219.
- Keenan, Edward L. (1976) "Towards a Universal Definition of 'Subject'," in Li Charles N. (ed.) *Subject and Topic*. New York: Academic Press. 303-333.
- Klenin, Emily R. (1974) *Russian Reflexive Pronouns and the Semantic Roles of Noun Phrases in Sentences*. Ph.D. dissertation, Princeton University.
- Kozinskij, I. Sh. (1983) *O Kategorii «Podležashchee» v Russkom Jazyke*. Predvaritel'nye Publikacii. vyp. 158. Institut Russkogo Jazyka AN SSSR.
- Mohanan, Tara (1994) *Argument Structure in Hindi*. Stanford, Calif.: CSLI Publications.
- 仁田義雄 (1991) 「ヴォイス的表現と自己制御性」仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』東京: くろしお出版. 31-57.
- Palmer, Frank. R. (1994) *Grammatical Roles and Relations*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Perlmutter, David M. (1982) "Syntactic Representation, Syntactic Levels, and the Notion of Subject," in Pauline Jacobson and Geoffrey K. Pullum (eds.) *The Nature of Syntactic Representation*. Dordrecht: Reidel. 283-340.
- Peshkovskij, A. M. (1956) *Russkij Sintaksis v Nauchnom Osveshchenii (izdanie sed'moe)*. Moskva: Uchpedgiz.
- Rappaport, Gilbert C. (1984) *Grammatical Function and Syntactic Structure: The Adverbial Participle of Russian*. Columbus, Ohio: Slavica Publishers.
- Rjabova, A. P. (1981) "Osobnosti Upotreblenija Deeprichasnogo Oborota v Predlozhenijax Passivnoj Perspektivy s Prichastnym Skazuemym," *Vestnik Mosk. un-ta*. Ser. 9. Filologija. No 2. 52-61.
- Shaxmatov, A. A. (1941) *Sintaksis Russkogo Jazyka (izdanie vtoroe)*. Leningrad: Uchpedgiz.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析: 生成文法の方法』東京: 大修館書店.
- Vinogradov, V. V. (1986) *Russkij Jazyk: Grammaticheskoe Uchenie o Slove (izdanie tret'e, ispravlennoe)*. Moskva: Vysshaja Shkola.
- 山田久就 (1997) 「ロシア語の経験者と格構文と主語特徴」『言語学論叢』第15・16号. 37-52.
- Xrakovskij, V. S. (1991) "Passivnye Konstrukcii," in Bondarko, A. V. et al. (eds.) 141-180.
- Yokoyama, Olga. T. (1979) *Studies in Russian Functional Syntax*. Ph.D. dissertation, Harvard University.